（別紙様式４―Ｂ）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

山梨大学
八板　光輝

本報告書では以下５つのことについて記した。

（ⅰ）語学
（ⅱ）化学の講義
（ⅳ）課外
（ⅴ）総括

（ⅰ）語学について

正直なところ語学に関して留学でしか学べないことといったらあまりないのが今日における留学の位置づけかもしれない。なぜならインターネットインフラの発達に伴い、今や 4 技能は全てオンラインで学べるからである。加えてネイティブイングリッシュスピーカーのいる英会話塾も各地にある。しかし、実際の生活において自然な形で言語を運用できるようになるにはやはり異国の地で生活する他ないだろう。つまり教科書やテストに対応できる英語力を身につけていては、それだけでは英語ができるようになったとは言い難いということである。決して教科書のフレーズを覚えるといったプロセスを蔑ろにしろと言っているわけではない。様々な人が話す少しずつ違った英語を聞き、その人と話すことで活きた英語力が身に付くというものであると考えている。その点において留学というのは有意義であると考える。

スピーキングというのは日本人が苦手とする分野である。私も留学した当初は人と話すというのは苦手であった。リアルタイムで言いたいことを英語にしなければならない。言いたい英語を日本語から直してというプロセスでやっていると遅延が生まれてしまう。これは慣れの問題だが、言いたいことが英語で最初から頭の中に浮かぶようになれば会話が苦手という意識は消え、やがて会話が上手くできるようになる。帰る頃には、わからない時はしっかり聞き直すことができるようになり意思疎通がスムーズにできるようになった。この能力は英語で毎日話す環境に置かれないとなかなか身につかないだろう。

また、履修科目のひとつにアカデミックライティングを扱った国語を入れていた。アカデミックライティングというのはエッセイや学術的な事柄を書く上で必要な文章力や展開といったことである。特に苦労したのはパラフレージングと呼ばれる技術である。一度使った言い回しはその文章では再び用いずに別の単語や文を使い置き換えるのである。高校までの簡単な作文ではこの概念が取り扱われることはないので大学に入ってから勉強していた時にはそれなりの苦労があった。しかし授業が終わる頃には同じ表現に偏らない多様な表現ができるようになった。

留学している最中、何度か英語を勉強する意味を自問することがあった。近いうちの人工知能による翻訳の精度を上がることで、もはや他の

言語を学ぶ必要がないのではないかと考えたからである。相性の良い言語同士ではかなりの精度で相互に翻訳できると聞く。しかし日本語と英語に関して言えば相性は悪く、まだまだ時間がかかるだろう。リアルタイムで精度の高い翻訳ツールといった夢の技術を手に入れられるのは決して明日ではない。１０年後、あるいはもっとかかるかもしれない。それまでの間は少なくとも英語を話せるようになるという目的において、英語を学ぶ意味はあるはずだ。また、思考プロセスというものは言語によって異なるものであり、その点においては英語を勉強しなくてはならない。すなわち、他言語を学ぶことで説得力のある論理展開やユーモアに富んだ表現ができるようになる。以上の２つの点から英語を勉強するというのは意味があると考える。

（ⅱ）化学の講義について

私は中学校の時から化学が好きであった。当時は研究者になるほどの熱意を持ち合わせていなかったが、大学に来てから就職か大学院進学という進路について考えるようになってから研究者になりたいとはっきりと思うようになった。研究者になるならノーベル賞受賞者を多く抱えるアメリカだろうという単純な動機からアメリカへの留学に興味を持った。また、日本で化学を学んできたが、アメリカの化学教育は日本とどのように違うのか気になったのもアメリカへ赴いた動機の一つであった。

秋学期は機器分析の座学やそれら実際に扱う実験といった授業をとった。液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、IR、UV-vis 分光機、X 線回折装置などの分析の基礎となる分析機器の測定原理やスペクトルの見方を勉強した。日本の授業と違うのは、概要だけでもいいような理論を丁寧に解説していたことだろう。その分、予習が多かったが非常にしっかりとした授業であった。次回は教科書の〇章と〇章をやるので予習として読んでおくようにと言われ、数百ページ程度英語の教科書を読むのは大変であった。また、実験では実験のパートナーと協力して基本的な分析手法について実験を行った。最後には今までの知識を用いて各チームに異なる食品が渡され、その分析を行なった。ここで面白かったのは自分で分析機器を選び実験計画を立てて、先生のアドバイスを受けた上で実験を行うというものがあったことである。このような学生の主体性を重きにおいた授業は刺激的であった。

春学期は専門科目に対してより重点のおいた授業を履修した。今日の主要な分析機器の一つである質量分析計だけを取り扱った授業はとても魅力的であった。質量分析計を専門とする教授による授業は懇切丁寧な理論とその応用を扱っていてとてもためになった。また、合成手法と分析方法と呼ばれる授業では、毎回事前に渡される論文を読んでそれについて授業で解説していく。授業内にその論文に似た実験を行った。大学院レベルの授業と事前に説明されていたので履修するか迷ったが、将来

のキャリア形成のことも考えるとぜひ取りたいと思い授業に参加した。実験では主に金属錯体の合成をしてUV-visやNMRといった分析手段で解析をした。毎回、寝不足になるほどのレポートをやっていたが、指導教授は親身になってアドバイスをくれたので、なんとか続けることができた。

以上のように普段体験できないような授業を数多く取ることができ、自分の知識を深めることができた。それでも吸収することができなかった部分もあるのでまだまだ勉強不足である。おそらくそれは自分の英語力が不足しているからである。

（ⅲ）課外活動

冬休み中は自分の住んでいた寮を退寮しなければならなかったのでアイオワ州にいる知人の家に滞在させていただくことになった。1ヶ月のうちに３家族の家を転々とした。２年前に会ったホストファミリーやお世話になった人に再び会うことができて非常に嬉しかった。実はアイオワで会った方々は2018年に大学の夏プログラムに参加して知り合った。プログラムの１ヶ月間を通して文化・語学研修、インターンシップを経験した。滞在先のデモインはアイオワ州の州都であり、甲府市と非常に長い間姉妹都市として友好関係を築いている。異国の地で様々な人と触れ合い、この経験を通してアメリカでもう一度勉強したいと思い、今回の留学へ至ったのもまた事実である。デモインに滞在中はカレーほうとうやすき焼きを振る舞ったりすることで日本文化だけでなく、山梨の文化を伝えることができた。ほうとうと言えば南瓜が入っているが、私はあえてかぼちゃを入れなかった。これは友人にほうとう作った時に残念ながら評判が良くなかったためであった。カレーを作りその中にご飯の代わりにほうとうの麺を入れて味噌で味付けをしてカレーほうとうにアレンジした。

Figure 1 ２年ぶりにホストファミリーに再開した時の様子

それは本当の山梨に古くからあるほうとうではないが、異文化を伝えるには相手の文化に合わせた伝え方をするべきであると考えたからである。寿司ロールと呼ばれる日本の寿司とは少し違う物が西洋諸国で市民権を得たことと似ているだろう。

また、COVID-19 の影響で授業が 3 月で中断となってしまいその後はオンラインコースになった。寮が閉鎖されてしまい、帰国をするか迷っていた際に現地の友人が力になってくれた。多くの友人から心配していただき友人の一人が実家の部屋を一部屋貸してくれることになり、授業が終わるまで友人宅に滞在させてもらった。アメリカの友人の暖かさに触れ、いつかは恩返しをしたいと思った。

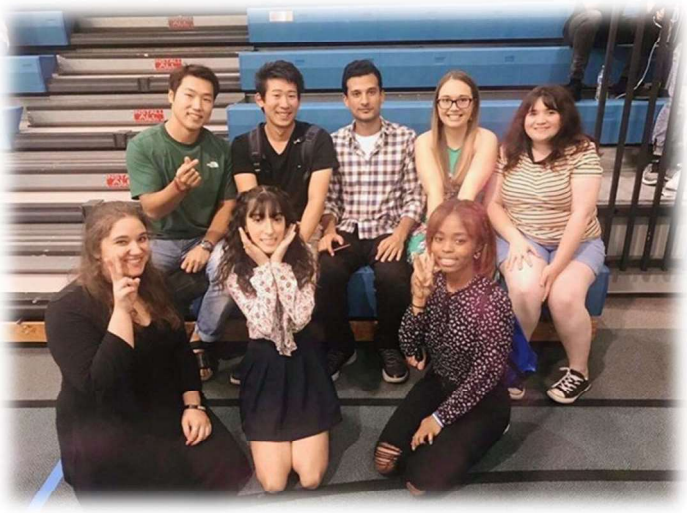

Figure 2 留学生とアメリカ人のコミュニティー

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

（ⅳ）総括

私は今回の留学を通して自分のもつ長所や課題を見つけることができた。海外に滞在して自己に対する認識を高めることができるのは留学の魅力かもしれない。挑戦、努力そして楽しむという 3 つのキーワードを持って何事にも当たることを心がけていた。この留学を通してそれらの重要性を再認識した。異国の地で暮らすというのは苦労が多く思い通りならないことが多かった。しかし、その状況を楽しんでこそ留学というものである。また、逆に自分に足りなかったのは人との関わりである。留学生同士のコミュニケーションが主になってしまいアメリカ人の学生と関わる機会が十分になかったように思えた。留学生という同じ境遇だからこそ話せたので共通点がない人に対するコミュニケーション能力としてはまだ不十分かもしれない。人から話しかけられるとうまく話すことができるのだが、こちら側話かけるとなると少し勇気がいるのは確かだった。これは今後の課題であり、アメリカでは重要視される能力である。

将来、可能であれば在籍している大学を卒業後、アメリカの大学院に再び行きたいと思っている。財政的な支援がアメリカは圧倒的に優れているので博士課程までの学位を取るにあたって金銭的な心配をしなくても良いので研究に集中できて良いだろう。それには今の英語力では不十分なので研究おける専門用語を交えたディスカッションができる能力をしっかり身につけておきたい。

今回の留学は COVID-19 の影響で授業は不完全なものなってしまい、決して満足のできる留学ではなくなってしまったが、こういった困難や悔しさは次に活かせるので、将来のために勉学に励んでいきたい。最後に私の留学を行う上で支えてくれた家族、友人、大学の職員、そして本奨学金に関わった山梨県庁の皆様に深く感謝したい。